

「英語の授業は英語で」に対する教師の思い、工夫、ジレンマ

藤田卓郎・吉田三郎

(福井工業高等専門学校)

1) はじめに

■ 本日の発表の前提

- 英語で授業を行うべきか否かについては議論しない
- 英語で授業を行うためにはどうすればよいかに焦点を当てる
- 「英語の授業を英語で行う」が指すもの
 - △ 教師が授業中に英語を話す
 - ○ teaching and learning English in English (Yamada & Hristoskova, 2011)
 - ○ メッセージ、コミュニケーション活動、タスクを中心とした授業と定義

2) 先行研究：Yamada & Hristoskova (2011)

■ TLEIE (Teaching & Learning English in English)に否定的な見解

- (1) 母語の使用により、教材の背景や文法構造などを効率的に教えることが可能
- (2) TLEIE の理論的根拠の欠如
- (3) 教師の信念と実践に関すること：入試が変わらないと何も変わらない
- (4) 教師の英語能力との関連：英検準1級、TOEIC 730, TOEFL PBT 550 等を超えている教師は少なくとも 50.6%
- (5) 教師の自由裁量権に関すること：学習指導要領が教師の使用する言語についてまで言及できるのか
- (6) 学習者の理解との関連：学習者の多くは英語が理解できなかったという報告

■ Yamada & Hristoskova (2011)：福井県内の高校英語教師を対象に TLEIE について質問紙調査 (表 1 参照)

表 1. TLEIE についての質問紙調査の結果 (Yamada & Hristoskova, 2011)

項目	(%)
1) 英語の授業を英語で行うことについておおいに賛同する、またはほぼ賛同する	52.7
2) TLEIE が導入されることによるメリットについて	
2-a) 英語を使用する自然な環境をつくることのできる	61.9
2-b) 生徒が英語により多く触れることになる	92.3
2-c) いつも英語を聞いていると英語を聞き取りやすくなる	68.7
2-d) 言語は実際のコミュニケーションで使って習得できるものである	83.2
3) TLEIE が導入されることによるデメリット	
3-a) 全て英語で授業をすると、困惑する生徒がいる	90.9
3-b) 英語力の低い生徒は日本語で説明する必要がある	86.2
3-c) 生徒のレベルにあった英語を使うのは難しい	52.6
3-d) 重要事項が理解できないことがある	81.7
3-e) 説明は日本語でした方がはるかに効率的なことが多い	71.0
4) JTE の英語使用場面について	
4-a) 言語材料の提示とコミュニケーション活動	51.9
4-b) 言語材料の提示とクラスルーム・イングリッシュ	20.6
4-c) 言語材料の提示のみ	15.3

表 1. (続き)

5) 教師の英語を生徒に理解させるために工夫していること	
5-a) 簡単な英語を話す	90.1
5-b) 繰り返す	80.2
5-c) ゆっくり話す	77.1

Note. totally agree と almost agree を合計した%を記載。また、2)と3)については、JTE の回答において、totally agree と almost agree の合計が 50%以上の項目のみ抽出。5) についても、JTE の回答において 50%以上の項目のみ抽出

■ 先行研究を踏まえて

- Yamada& Hristoskova (2011)は高校英語教師の TLEIE に対する考えの傾向を掴む点で非常に有益
- 一方で、英語の授業を英語でどう行うべきかという問いに答えるには、限定的な示唆→本研究で補完
- 世間話では色々出てくるけど…：現場の教師の「生の声」をもっと知りたい。→インタビューを行うきっかけに

3) 研究課題

中学校及び高等学校の英語教師は

課題 1) 英語の授業を英語で行うことに対してどのような思い（主に悩み、ジレンマ）を持っているのか

課題 2) 英語の授業を英語で行うためにどのような工夫をしているのか

4) 方法

1) 調査協力者

- 福井県内で勤務する英語教師（中学校、高等学校）9名を対象
- 中学校教師2名、高等学校勤務7名。詳細は表2参照
- 研究の趣旨を説明し、書面による同意を得た

表 2. 調査協力者

教師	性別	教員歴	校種
教師 A	男性	5年	A 中学校
教師 B	女性	3年	A 高等学校
教師 C	男性	26年	B 高等学校
教師 D	女性	10年	B 高等学校
教師 E	女性	13年	B 中学校
教師 F	男性	10年	C 高等学校
教師 G	女性	8年	D 高等学校
教師 H	男性	27年	E 高等学校
教師 I	女性	2年	A 高等学校

2) データ収集方法

- 半構造化面接 (semi-structured interview)
 - あらかじめ設定しておいた質問項目について尋ねると同時に、話の流れを加味して適宜質問を加える手法
 - 面接は発表者2人のいずれか、または両方が協力者の勤務校等に出向いて行った
 - 質問項目は表3参照 総録音時間：292分45秒

表 3. 面接における質問項目

1.	どの程度英語の授業を英語で行っていますか？
2.	英語で行っている具体的な活動や項目を（可能な限り詳しく）教えてください
3.	英語の授業を英語で行うために心がけていることはありますか？
4.	英語の授業を英語で行う上で苦労していることはありますか？
5.	（上であげた）苦労や困難にどのように対応していますか？
6.	授業中日本語を使用する場面はありますか？それはどのような場面ですか？
7.	ここはあえて日本語を使用したというところはありますか？
8.	（上であげた場面で）日本語を使用するのはなぜですか？
9.	授業外で英語に触れさせるような機会はありますか？
10.	英語の授業を英語で行うことに対して学習者はどのように思っていますか？
11.	大学受験や県模試等の対応はどうしていますか？（何か特別なことをしていますか？）
12.	中間試験、期末試験では、どのような問題を出题していますか？
13.	中間試験、期末試験と英語の授業の関連は意識していますか？

Note. 質問は表 3 の順で尋ねたわけではなく、話の流れによって適宜質問する順序を変更した

3) データ分析方法

- 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA)
- M-GTA の詳細については、木下 (2003) や西條 (2007) を参照
- 具体的な分析手順 (表 4 参照)
- 各説明概念に対する分析ワークシートの抜粋は付録参照

表 4. M-GTA に基づいた本研究のデータの分析手順

手順	概要
1)	収集された質的データ (面接の記録) を書き起こす (明らかな雑談及び協力者の要請があった箇所は削除)
2)	書き起こされた質的データを読み込む
3)	研究課題と関連があると考えられる箇所を分析ワークシート (表 5 参照) の「ヴァリエーション」欄に記入
4)	分析ワークシートの「理論的メモ」欄に 3) の解釈を記入する
5)	3) の類似例や対極例を探し、記入する
6)	3) ~ 5) を繰り返し、ヴァリエーションにある記述から説明概念 (解釈結果のまとめ) を生成する
7)	概念同士の関係を検討し、必要に応じて概念同士をまとめたカテゴリーを生成する
8)	結果図とストーリーライン (結果のまとめを要約した文章: 本発表では口頭で代替) を作成する

Note. 実際には、質的データを読み込みながら、手順 3) ~ 7) が同時並行的に行われた

表 5. 分析ワークシートの例

概念名	ゆるる思い
定義	英語で授業ができるために色々工夫していても、うまくいかないことが続くと、心が折れてしまう。また、同僚の先生方とスタンスが異なると、自分のスタンスに疑問を持つこともある。
ヴァリエーション	まず基本的なところが、こちらの説明していることが分かってもらえない。指示が通らない。特に口頭の場合ね。その段階でつまづいてしまったってのがこれまでようありましてし、今年もそうでしたね。で、 <u>それでもあきらめずに何か言い方変えてとか、提示する仕方変えてとか、色々やっていたかなきゃいけないんですが、途中でポキって折れて。</u> (教師 C: 高校)

	<p>何か迷っているんですよ。(同僚の教師から、最終的には和訳できないとね、それがトレーニングだからねっていうことを聞いていると) 段々そうなのかなって思ってきてしまっている自分がいて、今の流れと逆行しているけど、どっちが正しいか分からないなって。誰にも分からんのやろうけど、バランスが大事なんだろうけど、効率の良さも考えると、これが効果的やって思うことをやる方が、やっぱり優先されて来てしまうので、受験のこととかテストのこととかを考えると。難しいかな。(教師 B：高校)</p> <p>ドリル的な活動とか、形式的な面も増えてくるし、頭の中で実はそっちの方が実は力つくんちゃうのとか、思ってる部分もある。けど、今さらそんなことしたくないなっていう個人的な思いだけでやっている気もするから。(中略) スピーキングのテストが実際にはないし。いわゆる入試とかで。授業中は評価するけど。と、この子達は楽しんでやっているし、慣れてくるといい雰囲気になるんだけど、果たしてこの授業を受けていて恩恵を受けているのかなっていう、今の状況で、環境で。(教師 A：中学校)</p>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> ■ うまいかないと改善していかなければならないと考えつつも、心が折れてしまう。 ■ テストのことが気になるし、同僚の先生とスタンスが違うと、特に若い先生の場合、段々自分のスタンスを疑うようになるのかもしれない。 ■ 英語で授業を行うことが前提になりつつも、ドリル的な活動を行ったほうが、力がつくのではという指摘。英語で授業をやっていることに対して本当に効果があるのかどうかという疑問"

5) 結果と考察

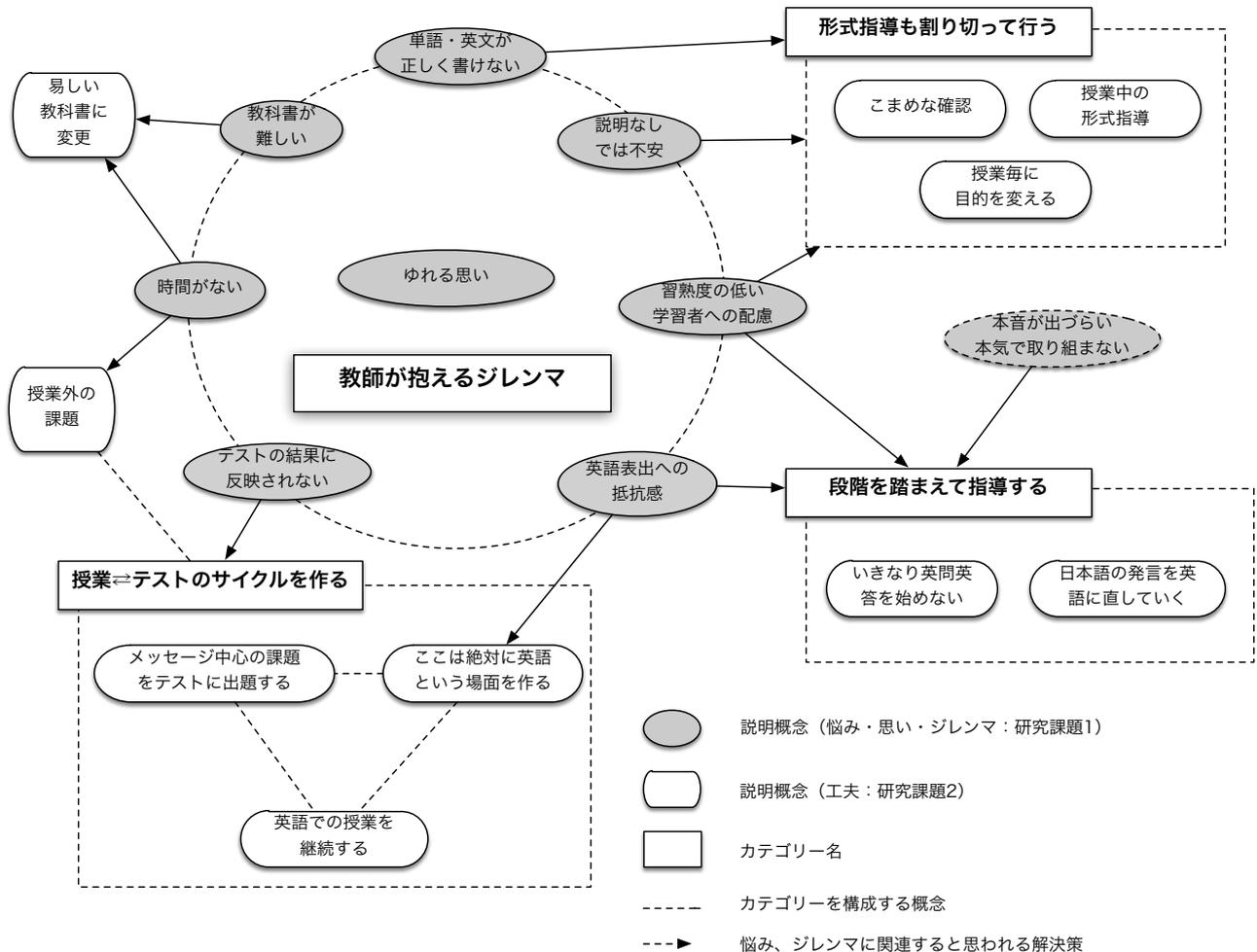


図 1：M-GTA による結果図：「英語の授業は英語で」に対する教師のジレンマとその対処法（詳細は付録参照）

6) まとめと示唆：少しでも「英語の授業は英語で」に近づけるために

1) 指導と評価を一体化させる工夫をする

- 「ここだけは英語で授業を行う」という場面を設定して継続的に行う。また、テストにも出題する
- 学年で統一してコミュニケーション活動を行ったり、英語で授業する教材等を決めたりする

2) 英語で授業 vs. 日本語で授業ではなく、日本語も取り入れた段階的な指導を心がける

- 日本語を使用することは悪ではない。大切なことは、英語で授業する姿勢をやめないこと
- 慌てて結果を求めない。最初は日本語が入ってもいいと考える。完璧を求めると教師も学習者もつらい
- 英語で行う部分、日本語で行う部分をよく考える。その目的も

3) 文法指導 vs. コミュニケーション活動ではなく、文法指導もコミュニケーション活動も行う

- 言語形式面の知識の指導も、コミュニケーション能力の育成も重要なことは、私たちは既に十分に分かっている
- 文法・語法の指導やドリルは、必要ならば割り切って行えばよい。形式指導は何らかの形で必要
- ただし形式指導、コミュニケーション活動のいずれか片方だけに偏らない努力をする。バランスが大事
- 「バランスが大事」で終わらずに、よいバランスで行った授業例、単元の指導例の共有を

謝辞

本発表にあたり、9名の先生方には、お忙しい時期にもかかわらず、そして急なお願いにもかかわらず、快くインタビューに応じていただきました。また、非常にたくさんの質問をさせていただいたにもかかわらず、率直なご意見をお聞かせいただきました。今回このような形で発表させていただきましたが、発表者自身が大変勉強させていただきました。9名の先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』 弘文堂

西條剛夫 (2007) 『ライブ講義質的研究とは何か』 新曜社

Yamada, H., & Hristoskova, G. (2011). Teaching and learning English in English in Japanese senior high schools – Teachers' & students' perceptions-. *Journal of Fukui-ken Eigo Kenkyu-kai*, 69, 3-33. Available at <http://crf.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/bitstream/10461/6851/2/Teaching%20%26%20Learning%20English%20in%20English%20-Ts%20%26%20Ss%20perceptions.pdf>